泌尿器科

医 長 ： 市川 孝治　　スタッフ： 常勤医師３名、非常勤医師１名、専修医１名

「指導と科の概要」

日本泌尿器科学会認定専門医・指導医の常勤医師３名，非常勤医１名および専修医１名が外来・入院診療，指導にあたっている。泌尿器科全般の成人例を対象（小児例は小児外科が担当）としているが，尿路性器癌の症例数が多く，特に前立腺癌患者数は増加傾向が著しい。QOL の維持・向上を目指した低侵襲手術に積極的に取り組んでおり，副腎，腎，前立腺に腹腔鏡手術と腹腔鏡下小切開手術（ミニマム創手術）を取り入れている。これらの手術は，従来の開放手術に比べて，術後の疼痛が少なく早期退院が可能で，しいては早期社会復帰が可能となる。

良性疾患に関しては，近年，泌尿器科は前立腺肥大症を中心とする男性専科から，女性の尿失禁，過活動膀胱，骨盤臓器脱，さらには男性と女性の両方が対象の性機能などを含め，カップルライフを支援する総合診療科として進化している。また，高齢者人口の増加に伴い，排尿障害，尿失禁患者が急増しており，泌尿器科は排泄ケアの中心的な役割を果たし，高齢化社会の QOL を改善するのに大いに役立っている。
さらに，腎移植チームの一員として，移植医療にも携わっている。

「研修の目的と特徴」

泌尿器科疾患のプライマリケアを中心に研修する。泌尿器科疾患の基礎的知識を背景とした問診および理学的所見の取り方を習得する。また，泌尿器科的救急処置，基本的手技を習得する。さらに，泌尿器科主要疾患の概念，診断法，治療法を習得する。

「教育方法」

1. 主要症候の理解と理学所見の習得
   ① 問診，触診の習得
   ② CT，MRI 等の読影

2. 検査法、治療法の理解と習熟
   ① 泌尿器科基本手技（導尿，膀胱洗浄，超音波検査，排泄性尿路造影など）の習得
   ② 特殊検査および手技（膀胱鏡検査，尿管カテーテル法等）の習得
   ③ EBM に基づいた治療の説明と，治療方針の決定
   ④ 手術，麻酔の一般的知識・手術手技の研修・術後の患者管理と合併症予防
   ⑤ 化学療法の知識と施行的の副作用対策

「修練目標と評価」

疾患名	経験する手技と習得すべき知識	経験症例数
共通	導尿法，膀胱洗浄	10例
	腹部超音波検査：膀胱，前立腺の観察と解釈	10例
	膀胱尿道鏡検査：適応と観察法の理解	5例
急性腎盂腎炎	抗菌薬の適正使用	1例
前立腺癌	前立腺生検：生検，術後処置および病理診断の理解	3例
	各種治療法の理解と適応	3例
膀胱癌	膀胱生検：生検，術後処置および病理診断の理解	2例
	各種治療法の理解と適応，尿路再建と QOL	2例

○ 評価 ： 院内の研修マニュアルに従って評価をおこなう。

＊ 将来の進路（専門研修に進んだ場合）と取得資格

主要な専門医資格

泌尿器科専門医：初期研修 2 年の後，4 年の泌尿器科専門研修が必要である。ただし，専門医試験の受験資格は 3 年専門研修終了後（卒後満 5 年）に得られる。

日本は世界に例を見ない超高齢化社会に突入しており，高齢者の抱える諸問題への対策が求められている。高齢化とともに癌の発生率は上昇する。とくに，前立腺癌はこれからの 20 年間でもっとも増加率の高い癌といわれている。また，排泄の問題は避けて通れない。排尿状態は専門的知識や技術を駆使することにより劇的に改善する。これからの超高齢化社会を支える泌尿器科医へのニーズは高い。

＊ Q ＆ A

Q. 専門医となったとき，就職先はあるのでしょうか？

A. 需要に供給が追いつかず，売り手市場です。総合病院のポストも空いています.

Q. 泌尿器科で扱う癌はいろいろ種類があって，いろいろな治療法があると聞いていますが？

A. 癌の手術以外の治療法として，化学療法，放射線療法，ホルモン療法，免疫療法などがあります。精巣腫瘍は化学療法がもっとも有効な固形癌であり，セミノーマは放射線療法が有効です。 癌のホルモン療法といえば前立腺癌がもっとも有効であり，膀胱上皮内癌に対する BCG 膀胱内注入療法はもっとも成功した免疫療法です。また，最近では，腎癌に対する分子標的治療薬が次々と開発されています。
癌に対しては種々の治療法がありますが，泌尿生殖器癌には最も効果が得られる疾患がそろっています。